

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K19591

研究課題名（和文）器械運動における学習者の受動的キネステーゼの顕現化を可能にする学習ツールの開発

研究課題名（英文）Development of learning tools to acquire passive kinesthesia of learners in the gymnastics of physical education

研究代表者

小倉 晃布（OGURA, AKINOBU）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：10780588

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：指導者をめざす学生の中には、運動が上手にできるけれども初心者に教えようとした際にうまく教えることができないという者も少なくない。本研究課題では、このような問題の解決策を現象学的立場から明らかにすることを試みた。結果的に、運動の熟練者であっても自己の動感意識を詳細に把握できていないわけではないことが明らかとなったが、学校現場などで初心者を相手に運動を教えるためにはこのような無意識的な動感意識（受動的キネステーゼ）を意図的に覚醒させ、能動的に把握する必要がある。本研究では、その方法論として「焦点化質問シート」を開発し、それをを用いた実践によって学生の受動的キネステーゼを顕現化できる可能性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、運動技能に長けた者（学生）が初心者（児童生徒）に運動を教える際には、自己の運動に関する動感意識を無意識的な部分（受動的意識）にまで切り込んで分析し、能動的に把握することの重要性が示された。また、本研究では、そのような運動熟練者である学生が自己の受動的な動感意識（受動的キネステーゼ）を能動的に把握するための具体的な方法論として、学習ツール「焦点化質問シート」が示され、その学習ツールを用いた実践によって、学生の受動的キネステーゼの顕現化の可能性が示された。本研究の成果は、指導者養成機関における「指導力をいかに養成するか」という中心的課題に対して一つの解決策の提示になるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In usually it is considered that people with good motor skill also have good skill to instruct movement. However in actually, they are often in trouble when trying to instruct to beginner or people who are not good at doing movement. This is because their movement sense [Kinaesthesia] is almost unconsciousness level and they do not always understand the appropriate Kinaesthesia for beginners. For that, it is necessary for them to analyze their own unconscious Kinaesthesia called "passive Kinaesthesia" which is key concept in the genetic phenomenology by E. Husserl. In this study was to develop the learning tools to awake the passive Kinaesthesia of students and to consider training process with these tools from viewpoint of Husserl's phenomenology, and then to show possibility and practical methodology to getting consciousness of own Kinaesthesia which is primarily unconscious.

研究分野：スポーツ運動学、発生運動学

キーワード：動感（キネステーゼ） 能動的意識 受動的意識 焦点化質問法 器械運動 促発能力 創発分析能力

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

これまで体育教師やスポーツ指導者など、指導者養成を目的とした大学の実技授業では、運動技能を習得していけば必然とその指導力も高まっていくと考えるのが一般的であった。しかし、実際は運動技能に長けた者でも自らの動きの感じをよく分かっているとは限らず、初心者や運動の苦手な生徒に教える場合にその動きの感じを伝えることができない者も多い。その理由として、われわれ人間の意識には、はっきりと自覚して意識できる能動的意識と、気づくという自覚がなく、自己意識を伴わない受動的意識（山口一郎『現象学ことはじめ』2012）があり、運動を上手にできる者にとっては、その運動を行うときの実施意識は、ほぼ受動的意識として処理されていることが多いからである。これは、われわれが日常生活の中で足の運びを意識せずとも上手に歩くことや階段を登ることができたり、腕や足の操作に意識を向けずとも自転車に乗ることが出来る例からも明らかである。つまり、人間の運動はその大半が無意識的に行われており、とりわけスポーツ運動では、運動技能の習熟度によってその運動を行うためのコツは意識の背景に沈んでしまっており、本人が気づくという自覚のないままの意識、すなわち「受動的キネステーズ」として機能していることになるのである。

指導者養成機関の実技授業の目的が運動技能を高めたり、動きを覚えることだけであればそのままで問題ないが、運動指導力を養成する場合には、この受動的キネステーズはきわめて大きな意味を持つ。なぜなら、運動熟練者が意識していない受動的キネステーズとしてのコツこそ、初心者や運動の苦手な生徒にとって重要なコツとなることが少なくないからである。そのため、指導者を目指す者には運動技能の向上や習得だけでなく運動実施に関する自らの受動的キネステーズを分析し、能動的に把握することが求められる。

近年、金子明友の一連の著書（わざの伝承；2002、身体知の形成；2005、身体知の構造；2007、スポーツ運動学；2009 など）によって体系化された「発生運動学」の運動理論においても、指導者を目指す者は指導者養成機関において「運動を教えるために運動を覚え直す」ことの必要性が繰り返し問題提起されている。この金子の発生運動学は、旧東独のマイネル（Meinel, K.）の運動理論に現象学者のフッサールやメルロ＝ポンティ、さらにはヴァイツゼッカー、ポイデンテイク等の人間学的運動理論を応用し、深化させた現象学的運動学としての理論体系である。金子はこの運動理論の中でフッサールの発生現象学的方法を用いることによって運動実施者の受動的キネステーズの解明が可能になることに言及しているが、その具体的方法や事例については未だ蓄積されておらず、運動指導に重要な役割を担う受動的キネステーズの解明は、現在のスポーツ運動研究において喫緊の課題となっている。

2. 研究の目的

そこで本研究では、このフッサールの発生現象学や金子の発生運動学を研究の土台とし、指導者養成機関における器械運動の事例を取り上げ、指導者を目指す学生の受動的キネステーズの内実を現象学的観点から解明するための具体的方法を提示することを目的とする。

つまり、本研究課題では、運動指導者を目指す学生の受動的キネステーズを発生運動学の方法である「焦点化質問法」を用いて能動的意識に顕現化し、運動指導に必要な動感として形成するための学習ツールを開発し、この学習ツールの受動的キネステーズの顕現化における方法論的意義を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、この焦点化質問法を用いた学習ツール「焦点化質問シート」を開発し、この学習ツールを用いた指導実践によって学生の受動的キネステーズの顕現化が可能であるかを、以下の計画・方法に即して検証していった。

・マット運動の基本技を習得済みの学生を対象に、学習ツールを用いた指導実践を行った

・学生の受動的キネステーズの顕現化に関する学習ツールの方法論的妥当性を検証した

(1) マット運動の基本技（側方倒立回転）を習得済みの学生を選出し、指導実践前に、技を実施する際の現時点の意識内容をインタビュー調査により明らかにした

(2) 学生を対象に指導者（申請者）が指導実践を行い、指導後に側方倒立回転に関する学生の動感意識がどのように変容したかを焦点化質問シートの記述内容を分析し、明らかにした

(3) 指導実践の前後における学生の動感意識の変容を考察することを通して、学生の受動的キネステーズの顕現化に関する焦点化質問シート活用の方法論的妥当性を現象学的立場から検証した

4. 研究成果

(1) 令和2年度

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により当初予定していた指導実践が遂行できなかったため、研究計画を変更し、本研究の課題である「学習者の受動的キネステーズを顕現化するための学習ツール」に関する理論的基礎を、文献研究によりまとめる作業を中心に行った。そのなかで、本研究のキーワードの一つである「受動的キネステーズ」は、本人が気づかないまま無意識的に行っている動感（キネステーズ）であることの確認が行われた。また、この受動的キネステーズは、本人が気づく以前に無意識的に作用していることを、研究代表者自身の過去の指導事例を現象学的観点から考察することを通して明らかにしていった。

これにより、本研究で開発を目指す学習ツール(焦点化質問シート)の理論的基礎が確立され、実際に学習ツールを用いた指導実践を実施するための準備段階が整ったと言える。とくに、令和2年度の研究成果として、受動的キネステーズの働きを明らかにするためには、本人の気づくという現象が前提となり、気づくという現象の生成過程における「触発」と「関心」の関係性は、本研究の焦点化質問シートを作成する上での重要な知見となった。

(2)令和3年度

令和3年度は、本研究の課題である「学習者の受動的キネステーズを顕現化させるための学習ツール」として「焦点化質問シート」を開発し、この「焦点化質問シート」を用いた学習実験(指導実践)を、指導者志望学生を対象に実施することを通して、この学習ツールの実践的意義を明らかにすることを中心に行った。

具体的には、マット運動の側方倒立回転を題材として取り上げ、側方倒立回転を“できる”学生が、自身の動感(キネステーズ)、とりわけ初心者指導に重要な側方倒立回転の“コツ”を能動的に把握しているかどうかを学習実験(指導実践)により調査した。学習実験(指導実践)は、2021年8月に北海道教育大学岩見沢校で実施し、4名の指導者志望学生を対象とした。

結果的に、側方倒立回転が“できる”学生であっても、自身の動感(キネステーズ)を能動的に把握しているとは限らないことが明らかにされ、なおかつ、本研究で開発した「焦点化質問シート」を用いた指導実践が、学生自身が能動的に把握できていない動感(受動的キネステーズ)を能動的意識に浮かび上がらせ、自身の動感(キネステーズ)を言語化する活動を通して、意識的に把握することに寄与した可能性が示された。また、それに伴い、指導実践を展開する指導者(研究者)の能力性を明らかにする必要性も示された。

この指導実践の成果は、本研究で開発した「焦点化質問シート」の実践的意義を裏付ける人間科学的根拠となることが考えられ、体育教員やスポーツ指導者など運動指導の現場に立つ者にとって不可欠な専門的能力を養成するための方法論を考える上で、重要な根拠となることが考えられる。

(3)令和4年度

令和4年度は、本研究課題の最終年度であり、これまでの研究成果を論文投稿ならびに学会発表にまとめることを中心に実施した。具体的には、日本体操競技・器械運動学会が発刊する「体操競技・器械運動研究第30号」に論文「指導者志望学生の受動的キネステーズの顕現化を促す指導実践に関する考察 - マット運動における側方倒立回転を事例として -」を投稿し、受理され、2022年4月に掲載された。

また、2022年6月に北海道教育大学札幌校にて開催された第27回日本体育科教育学会において「教員志望学生の運動の技術認識に関する問題性 - マット運動における側方倒立回転を事例として -」の口頭発表を、2022年8月に順天堂大学で開催された第72回日本体育・スポーツ・健康学会では「教員志望学生の授業づくりにおける動感創発体験が教材解釈の認識に与える影響」の口頭発表を行った。以上が令和4年度の具体的な研究成果である。

本研究課題では、体育教員やスポーツ指導者をめざす学生の中には、たとえば器械運動の技が上手にできるけれども、それを初心者に教えようとした際にうまく教えることができないという問題を出発点に、その問題の解決策を現象学的立場から明らかにしようとした。結果的に、運動が上手にできる学生であっても、学生本人は「今、自分がどのように動いているか」という“動感意識”を詳細に把握できていないことが明らかとなった。しかし、学校現場など初心者を相手に運動を教えるためにはこのような無意識的な動感意識(受動的キネステーズ)を意図的に覚醒させ、能動的に把握する方法論が必要であり、本研究を通じて、その方法論としての学習ツール「焦点化質問シート」によってこれらの学生の受動的キネステーズを顕現化できる可能性が明らかとなり、指導者の専門的指導力養成の方法論構築に関する基礎的知見を得ることができた。

【引用文献】

- ・ 山口一郎『現象学ことはじめ』日本評論社、2012
- ・ 金子明友『わざの伝承』明和出版、2002
- ・ 金子明友『身体知の形成(上)(下)』明和出版、2005
- ・ 金子明友『身体知の構造』明和出版、2007
- ・ 金子明友『スポーツ運動学 - 身体知の分析論』明和出版、2009

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小倉 晃布	4. 巻 33
2. 論文標題 時間的制約を意識した促発指導における起点構成化に関する事例的研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 スポーツ運動学研究	6. 最初と最後の頁 101～121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32261/bewegungslehre.33.0_101	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小倉 晃布	4. 巻 5
2. 論文標題 保健体育科教員養成における教科に関する科目「運動学（運動方法学を含む。）」の内容検討 - 学生への事前・事後アンケートの結果をもとに -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 星槎大学教職研究	6. 最初と最後の頁 9～16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小倉 晃布	4. 巻 56
2. 論文標題 コーチングにおける指導者の転機分析力に関する現象学的考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北海道体育学研究	6. 最初と最後の頁 83～95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小倉 晃布	4. 巻 30
2. 論文標題 指導者志望学生の受動的キネステ - ゼの顕現化を促す指導実践に関する考察 - マット運動における側方倒立回転を事例として -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 体操競技・器械運動研究	6. 最初と最後の頁 29～49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小倉晃布
2. 発表標題 器械運動における学習者の受動的キネステーゼの顕現化を促す学習ツールの検討
3. 学会等名 第71回 日本体育・スポーツ・健康学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akinobu, OGURA
2. 発表標題 A Case Study on the Instruction Method for Vaulting Box in Gymnastics
3. 学会等名 The 2020 Yokohama Sport Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小倉晃布
2. 発表標題 教員志望学生の運動の技術認識に関する問題性 - マット運動における側方倒立回転を事例として -
3. 学会等名 第27回 日本体育科教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小倉晃布
2. 発表標題 教員志望学生の授業づくりにおける動感創発体験が教材解釈の認識に与える影響
3. 学会等名 第72回 日本体育・スポーツ・健康学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------